



日本の経済は好調を取り戻したかのように見える。地価、有効求人倍率や日経平均株価などの経済指標は30年前のバブル期の水準を回復し数字は戻った。しかしバブル当時の世の中とは違い人々は浮かれた気分になれず、むしろ言い知れぬ不安が社会全体を覆っている。

今の世の中、何が起これても不思議ではない。地球上の人口は爆発的に増える一方先進国では高齢化と人口減少が始まり、富の格差と貧困率は以前より拡大し、あちらこちらで戦争やテロが勃発し対立が激化している。日

行き詰まった世界をどう生きるか

—コペル君に学ぶ—

情報広報部長

山科 賢児

本でも地震などの自然災害や、金融政策の失敗による国家の財政破綻、医療費の増大や年金制度の破綻による社会保障制度の崩壊の可能性など、夢にも思わなかった様々な不安や不信が、一挙に押し寄せている。その反面、事の重大さに気づいていながらも自分の身には降りかからないと言いつつも、とりあえず毎日何とかならばいいと解決への決断を先送りしている不可解な現実が社会にある。

戦後やバブル期のようなダイナミックな成長や繁栄が日本に再び蘇ると考えている人は今や皆無だろう。政治もメディアもバランス感覚を失い、SNS上では攻撃的発言が目立

ち、自己中心的な考えや他者の排除や妬みなど殺伐とした風潮が社会に浸透し、何を信じてよいのかわからない日本になりつつある。平和で安全と信じられていた日本でいつ不測の事態が起こらないとも限らない。

今の時代をどう生きるかのヒントになる本が新装版や漫画となって再び読まれている。80年前の吉野源三郎の著書「君たちはどう生きるか」である。15歳の主人公コペル君が叔父さんとの対話や「おじさんのノート」を通じてやり取りの中でどう生きるかを自ら考え、生き方を学ぶ成長過程が描かれている。出版

された当時の社会状況は、日本が日中戦争それに続く第二次世界大戦の泥沼に入っていく時期と重なっている。言論の自由が制限されて、自分の頭で考えたものに、自分の頭で考える大切さを伝えたい強い思いから生まれた。

「結果より僕はこのように生きたいと思うことが、自分の生き方を決定する」「逆境や苦しみを感ずるのは前進している証拠だ。考えること、悩むことに価値がある」「道徳的な真面目なテーマを最後まで読ませるエンターテインメントになっている」などの著名人の評は的を射ているが、10代の読者からの声がより刺激的で感動する。「コペル君みたいに自分を変えようとする力が湧く」「今が当たり前ではないという事を心に刻んだ」「生きるうえで、他者の意見がとても重要である」「一方的な情報をうのみにして思考するのを止めた人が多いと感じる」など若い世代は大人よりずっと自分の頭

で考えている。

「どう生きるか」と同様に「何のために生きていくのか、死ぬまでどう生きていくのか」は日本の差し迫った命題である。今の日本は人生に例えれば下り坂であり、肉体的精神的能力の低下を認めざるを得ない。「人は一人では生きられない」「出来ないことや変わらなないことは受け止め、先に進む」「勇気がなく踏み出せなかったコペル君の気持ちに痛いほど胸に響く」コペル君の持つ柔軟な感性を今の日本に呼び戻せるだろうか。

「おじさんのノート」で述べられる「人間の悩みと、過ちと、偉大さについて」はこの著書の真髄であろう。「苦痛を感じ、からだが故障を知ることが、からだだが正常でないことを苦痛が僕たちに知らせしてくれる」「人間が不幸を感じたり苦痛を覚えるのは、人間がもともと憎みあったり敵対しあったりするべきものではないからだ」など珠玉の言葉がいっぱいである。

予期不安を抱える世界では漠然とした不安だけが先行し、どう生きるかの答えは簡単に見つからない。「悩みや痛みを感じながらも前に進み、自分はこう生きたいと考え続け行動することが、自分の生き方を決めるうえで肝心である」とコペル君の叔父さんは語る。その実現には尊敬し信頼できる人との心の対話や、日常とは異なる海外などの環境に身を置き、刺激を受けて自分の価値観を変化させるのも一つの方法であろう。行き詰まった世界だからこそ常識に流されるのではなく、コペル君のように一人一人が「どう生きるか」自ら考え行動し、希望の在り処を見つけ出したい。